九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一、二の石炭資料の紹介

武野, 要子
福岡大学商学部

https://doi.org/10.15017/13544

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 1, pp.9-10, 1973-05-08. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

一、二の石炭資料の紹介

武野要子

幕末長崎の石炭に関する資料の中から興味あるもの若干をとりあげ、左に紹介しょう。

その一

「一、日本政府向石炭囲場所外国へ御差図の事

右は北米西方亜細亜東方に於て蒸汽船渡海の為め就中北米合衆国の為めに是まで既に唐国にても相立て候場所も有之候就ては右の振合にて石炭囲場所相立て候事肝要と奉存候」

二〇〇余年にわたって対日貿易を半ば独占してきたオランダは、嘉永五年九月オランダ商館長ドンケル・クルチュウスの名前で、極東の政治経済情勢、日本の開国の必要性、開国後の貿易のあり方等について、四箇条からなる意見書を長崎奉行に提出した。右はその最後の箇条の一節である。蒸汽船の燃料源石炭の貯蔵の場所を、日本政府の責任で確保すべきこと、なお同種の貯蔵場がすでに中国に建設されていること、以上二点がそのおもな趣旨である。貯蔵場を日本のどこに設けるかについては明確にしていないが、別の項で長崎港を通商の場とするとして幕初以来の方式を踏襲すべき旨主張しているから、貯蔵場としてもやはり長崎一港を宛てていたのではなかろうか。同意見書には石炭貯蔵場のほかに寄港船舶への薪水の補給と修繕用ドッグの提供が要求項目としてあげられており、交通革命の中で日本の開国が不可避であることを強調している。貿易港を長崎一港に限定し、日本商人をこれまで通り五ケ所商人に限るなど、開港後も自国オランダの取引き上の優位を確保しようとする手前勝手な面が多多見うけられるにせよ、当時の日本がおかれた国際情勢を客観的に幕府当局に説明した点は、大きく評価できよう。なお、オランダとの仮条約は安政二年九月締結され、同年十月出島の門が開かれた。ここにおいて二百余年にわたる出島蘭館貿易に終止符をうったのである。

その二

「使節

一、近来蒸気船発明致候後、世界之模様一変致し候、右船之風之順逆ニ不拘、迅速ニ海上往来いたし、たとへハ外国ニ而順風三四日路之処ハ蒸気船は逆風ニ而も右日和を以通船相成候、是を以懸隔候国々も互ニ近く相成、異国之船之往来繁く相成候ニ付而は、薪水食料を求候ため是非御国地江立入可申、且石炭は蒸気船必用之品ニ付、是又御国地ニ於て求め候ハねハ難相叶候、扨又軍卒之器械古ニ引競候而は追々精密辨利を極候様ニ相成、貴国ニも御備無之而は難成時世ニ付、御入用之儀も御座候ハヽ、蒸気船軍船は勿論、大砲其外之軍器何程も差上可申候」

左衛門尉

一、心得候　右は政府之指揮ニ可有之事ニ付、只今何共難及挨拶候」

右は嘉永六年十二月廿四日に行なわれた、ロシア使節と幕府の海防係川路左衛門尉の対話の一節である。いわゆる「蒸気船時代」の到来を的確に説明しており、それにつけて日本に薪水や食料を求めて外国船が入港するのは必至であり、蒸気船の運航に不可欠の燃料源石炭は当然日本で求められねばならないと強調している。また、興味深いのは西洋式軍備の拡充が早急になさるべきこととその援助をおしまないことを警告かつ提案している点である。この対話が、長崎伝習ー洋式海軍技術・操練術の輸入ー開始の前年行なわれた点に注目しなければならない。

その三（綴りは原史料のまま）

To The Treasury Officers
Nagasaki

Gentlemens

Please send to the "Cuethage" as soon as possible
Forty Thousand Piculs by to be paid for in old obblige.

M. Ewares

20th August 1859

「英蒸気カッテーシー船　七月廿二日
長崎会所役人江

石炭四拾万斤可成早々御送り被下度事
但払方は古銀札にて可致候

千八百五十九年八月廿日
エム、イーウェレス

訳
品川藤十郎」

これは「諸勘定其外綴込　安政六未御開港以後元治元年迄　長崎運上所」の一節である。長崎港停泊中のイギリス蒸気船カッテージ号のエム・イーウェレス（船長か）が、安政六年七月二二日付けで長崎会所へ石炭四〇万斤の融通方を依頼した文書である。長崎が箱館と共にイギリスに開港されたのは安政元年八月二十三日であり、同六年といえばかなり外交・取引きの制度面の整備をみたはずである。たとえば石炭や食料薪水などの補給は、開港場の役所の所管であることが和親条約にうたわれており、長崎では幕府の貿易機関である長崎会所がそれを担当し、石炭取扱い係という名目で四、五名を配置した文言中「長崎会所役人」とはそれらを示すものであろう。英文の翻訳を担当した品川藤十郎についてはあまり明らかではないが、オランダ通詞の品川氏の一族であろうか。品川忠道はオランダ語のみならず英語にも精通し、明治にいたり上海に領事館が新設されるや領事として派遣され、総領事を経て、外務省通商局長に任命された。三井物産など商社の海外雄飛に一役かったともいわれている。